2019 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	野口　裕美
研究テーマ	被災地支援としての動物介在療法とロボットセラピーにおける被災者の心ケアの可能性につて～継続的な支援の効果～

＜助成研究の要旨＞

【目的】

動物介在療法が被災者の心ケアとして不安やストレスの軽減に十分効果を発揮できるのではないかと考え、被災地支援として、生きた動物を介在させる動物介在療法といつも動物の比較対象になる存在で、今後の活躍が期待されているコミュニケーションロボットを介在させるロボットセラピーを実施し、被災者に対する心理的な効果を比較検証した。また、発災後の時間経過の中で変化する心理的な変化の各段階において心理的支援として効果な方法と時期を明らかにするために、発災時期の異なる地域にて調査を実施し、単発支援と継続的な支援を実施し、効果を比較した。今後の災害時に適切な時期に適切な手段で心の支援ができる様にシステムを構築する。

【方法】

発災後、経過時間の異なる宮城、広島の地域で動物介在療法とロボットセラピーを実施した。　多種、多様なコミュニケーションロボットから対称的な機能を有するものを 2 種類選択した。1 種類は人型ロボットのパルロ、もう 1 種類は犬型ロボットのアイボとした。また、宮城では継続的に介入を行った。

・実施場所：仮設住宅、集合住宅における集会場
・実施方法：1 回の介入時間は調査と活動を含めて 1 時間（介入前後で各 15 分の調査を実施）
・実施内容：
　1）介入方法：　集団に対して、犬およびロボットの介入
　2）介入回数：広島　各　1 回　、宮城　各 3 回
・対象：集会場に自由意志で集まる成人～高齢者
・尺度：不安・ストレスの量的評価
　・主観的評価（実施前後）：不安・ストレスを評価尺度を用いて調査（STAI）
　・生理学的評価（実施中）：自律神経系の活動を測定する指標として心拍 R-R 間隔を定量化し、自律神経系解析プログラムで解析

【結果・考察】

既に様々な形で被災地での支援活動が展開されている。有効に活用されたものとそうでないものがあり、外部支援者を大量に受け入れることが既存の地域システムへの脅威と捉える力動が働き、外部支援者に強い抵抗感を抱いているとう報告もある。今回、広島と宮城で同様の介入を実施した。広島と宮城では反応が異なる結果となった。広島では全ての介入において、即時的もしくは長期的な不安の状態に軽減効果を示したが、経過から長い年月を経た宮城では、特に個人の特徴を形成していると言われる特性不安にどの介入も影響を与える事は出来なかった。また、犬の介入では即時的にも長期的にも主観的な不安状態に影響はみられず、一方で、生理学的指標では犬の介入で交感神経が最も優位になるという結果を得た。主観的な感情と客観的な感情の乖離が示唆された。また、発災後、9 年経過する被災者にとっては継続的な支援による同じ介入での効果の積み重ねはロボット（パルロ）のみみられた。よって、今までに経験をしたことが無い様な新たな介入が被災者の一時的な不安の軽減には効果期待できる事が示唆された。今回は現地では単発的な支援から継続的な支援を必要としている段階に必ず入っていくことを現地のニーズから汲み取り、継続的な支援の調査も実施した。しっかりと効果検証し、介入内容によっては現場のニーズと実際の効果には若干の隔たりを示唆する結果を得た。現場の声となるニーズと効果として意味のある支援を明らかにし、支援の交通整備の一助になったと考えられる。